

学位論文題名

戦後文学研究

— 〈戦後〉の来歴 —

学位論文内容の要旨

本論文は次のように展開する。まず、敗戦直後の戦争に突入するのを止められなかったことへの反省から提唱されていた主体性論が、さまざまな角度から考察される。その中でも、「肉体」「エゴイズム」の見極めとして展開する『近代文学』派の主体性論を中心に提起し、国家や社会への責任追及より自己内省を優先することが、戦後の出発にふさわしい倫理的な態度であり、この倫理性が「文学」の問題とされた点を指摘する。

続いて、このような『近代文学』派の主体性論に孕まれていた、主体の確立を目指す「文学」的欲望は、梅崎春夫の「桜島」や武田泰淳の「審判」、「政治と文学」の克服を試みた竹内好の国民文学論にも見出せることが確認される。しかしながら、彼らの「文学」的欲望は『近代文学』派的な「文学」の発見によって満たされるのではなく、むしろ欲望そのものがさまざまに変容して、「文学」を捉え直す批評性を獲得していると評価する。このような同時代的な文脈とのせめぎ合いによって〈戦後〉を捉え直し、戦後文学の相貌を明らかにする。

以下、章ごとの要旨を述べる。

序章「〈戦後〉の問い直しと再評価に向けて」では、〈戦後〉の問い直しの視座を提出し、本論文の目的と方法、構成について論じる。

第1章『近代文学』派の諸問題では、『近代文学』派の中でも中心的な位置を占めていた荒正人・平野謙の主体性論などを取り上げながら、『近代文学』派の「政治と文学」という枠組みを批判的に分析する。第1節「プリミティブな「文学」——肉体・主体・エゴイズム」では、二人が本質主義的な「肉体」から出発しようとしたことの問題を考察する。その過程で、丸山眞男や梅本克己らの主体性論にも言及する。「政治」に対する「文学」の位相を探りながら、荒正人・平野謙は、言語以前の位相から「文学」を出発させようとしたが、そのような位相は言語によって仮構されたものでしかなく、この点に無自覚なまま、二人は「文学」を模索するという転倒を犯していたことを指摘する。第2節「灰色の月」評価をめぐって——荒正人の「民衆」論では、荒が志賀直哉の「灰色の月」を高く評価していたことに注目する。「灰色の月」に対する他の批判的評価にも注目することで、荒の「灰色の月」評価の問題点を見極める。「灰色の月」はマルクス主義者や無頼派にも取り上げられており、その評価を追うこと

は当時の言説空間を照らすことにつながる。荒の読みを対象化しながら、「文学」の問題を考察する。第3節「『肉体／文学』の境界——『肉体の門』ブームと文壇」では、『近代文学』派と田村泰次郎が提唱した「肉体文学」と「文学」の関係を検討する。田村の「肉体」観は、『近代文学』派の主体性論とも重なる要素を持ち合わせていたと考えられるが、「肉体の門」ブームは、『近代文学』派の「文学」と「肉体文学」の腑分けに寄与することになる。田村泰次郎の「肉体」と『近代文学』派の「文学」の境界線がどのように設定されたのかを明らかにする。田村の「肉体」は、『近代文学』派と似た思想性を持っていた。しかし、田村の「肉体」は平野によって「文学」から遠ざけられる。文壇時評の中で、遂行的に両者の間に境界線が引かれていたのである。

第2章「『道義』言説と戦後批評」では、「道義」をキーワードにして、敗戦直後の「道義」言説とそれに対する戦後批評の意義に注目し、敗戦直後の社会状況と文学的言説との関わりを明らかにする。第1節「『道義』への抵抗——坂口安吾「続墮落論」と中野重治「冬に入る」」では、生存のためのエゴイズムが肯定的に語られる一方、指導者層や保守的な知識人による「道義」言説が国体の連続性を企図していたことを踏まえる。この連続性を対象化していた文学者として、坂口安吾と中野重治の議論に焦点を当てる。「道義」の回復に言及する指導者層が国体の護持を図ろうとすることに対して、坂口安吾と中野重治がそれぞれ「続墮落論」と「冬に入る」でどのような批評を試みていたのかを分析する。そのことから、『近代文学』派が見過ごしていた言説の行為遂行的な効果に敏感な二人の思想性を明らかにする。第2節「戦争の不可能性と「墮落」——坂口安吾の戦後」では、原子爆弾の投下が安吾の批評にどのような変化をもたらしたのかを検証する。戦争の効用として安吾は抑止論的な想像力を内面化しているが、テクノロジーの進歩という「効用」が失われた点に戦争の不可能性のネガティブな意味を見出すことで、「世界史的立場」から世界の行く末を語ろうとする論者たちを批評している。安吾の「墮落」とは、戦争の不可能性に直面した安吾の（戦後）的な方法であると位置づける。

第3章「梅崎春生論」では、軍隊と同時代の世相の両方を描いた戦後派作家である梅崎春生を取り上げる。第1節「不可視性と戦争——「桜島」論Ⅰ」では、死が視覚的な対象としては現れず、ラジオや登場人物との対話によって暗示される状況下に置かれた語り手が、死を先取りするモノローグを回避する様子を確認した上で、敗戦直前の軍隊を舞台にした「桜島」を主体化の欲望を批評するテキストとして分析する。「桜島」は、軍隊批判・権力批判の欠如を指摘されてきたが、主体性や他者との対話性をめぐるそうした評価基準は、戦後派文学が「政治と文学」のパースペクティブから読まれてきたことに由来する点を明らかにした。第2節「逃走＝闘争する「言葉」——「桜島」論Ⅱ」は、「桜島」を言語行為として読み直す試みである。遺書を書こうとしたが、「言葉以前の悲しみ」を書くことができなかつたと「言葉」にすることで、「桜島」の「言葉」はモノローグを克服して主体性を確立するという、論理の転倒を露呈する戦略性を帯びることになったと述べる。言語化の不可能性に突き当たる「桜島」が、主体確立の論理を批評する戦略的なテキストであるということを明らかに

した。第3節「飢えと「エゴイズム」——梅崎春生の世相小説」では、前章で取り上げた「道義」とも関わる飢えや闇市といった戦後の世相を描いた作品群を取り上げる。梅崎はこれらのテキストにおいて世相を描きながら、「エゴイズム」の肯定にとどまらないユーモアを描出していた。特に「蛄」と「飢えの季節」という小説に着目し、前者が食糧難と「エゴイズム」の関係を描き、後者が天皇制に対する批判も示しながら飢えをユーモラスに描いていることを明らかにする。両テキストは飢えによる「エゴイズム」の肯定という主題からも、戦後の現実に対するニヒリズムからも一線を画していたと指摘する。

第4章「武田泰淳と竹内好のナショナリティ」では、上海で敗戦を迎えた武田泰淳と中国文学研究者であった竹内好を取り上げ、二人が、〈戦後〉とナショナリズムの問題と向き合っていたことを明らかにする。第1節「復員兵への応答——武田泰淳「審判」」では、応召中に中国人を殺した復員兵の贖罪という倫理的、「文学」的問題を考慮しながら、「審判」が書簡体小説としての構成を持っていることを重視して改めて評価する。「審判」での焦点は、「審判」における戦争責任の捉え方にあった。殺人を犯した復員兵・二郎の贖罪は「文学」的であったが、書簡の持つ他者志向性がテキストの生成につながる「審判」は、ポストコロニアルな文脈の中に位置づけられると述べる。第2節「滅亡」を換算する——武田泰淳「滅亡について」」では、エッセイ「滅亡について」を取り上げ、武田の「滅亡」観の新たな読解を試みる。戦中から一貫した思想性を体現していると評価されるこのエッセイは、原子爆弾に言及しながら、「滅亡」を逃れた戦後日本を捉えようとしていた。戦後日本の出発を「滅亡」の不可能性として捉えていた武田の「滅亡」観は、戦中の『司馬遷』に見られるが、日本人が「部分的な滅亡」からの「残余の生存」であるという「滅亡について」の認識は、戦後に初めて獲得されたものである。「二発」という投下数にこだわる武田は、戦争の不可能性と世界平和への意志を容易に語らせる抑止論的な想像力を対象化している。武田の「滅亡」観は、〈戦後〉的な文脈を抜きにしては生まれなかったことを明らかにする。第3節「竹内好の「文学」——国民文学論を中心に」では、竹内好の「文学」概念を論じる。竹内は国民の形成という企図とともに、「政治と文学」の克服という企図によって国民文学の確立を提唱した。竹内はナショナリズムを重視する一方で、『近代文学』派の「政治と文学」という構図を批判していたのである。国民文学論争を概観しながら、竹内の「文学」の意義を見出す。『近代文学』派の「文学」も、反米愛国の「政治」的スローガンも忌避する竹内は、「政治」と「文学」の役割を機能的に果たす言語行為として「文学」を捉え直しているという。

終章「〈戦後〉と「文学」的欲望の現在」では、各章の内容を整理したうえで、〈戦後〉と主体をめぐる近年の議論に触れ、〈戦後〉を問う本論の意義を提示する。

# 学位論文審査の要旨

主 査 准教授 押 野 武 志  
副 査 教 授 佐 藤 淳 二  
副 査 准教授 水 溜 真由美

学 位 論 文 題 名

## 戦後文学研究

— 〈戦後〉の来歴 —

平成 22 年 4 月 9 日開催の文学研究科教授会において、審査委員会の発足が認められた。平成 22 年 4 月 13 日に第 1 回審査委員会を開き、申請論文の配布と審査日程の調整を行った。平成 22 年 5 月 19 日に第 2 回審査委員会を開き、申請論文の内容の検討と質問事項の整理を行った。

平成 22 年 5 月 20 日に口頭試問を実施した。口頭試問終了後、第 3 回審査委員会を開き、ただちに学位授与可否の判定を行った。平成 22 年 5 月 27 日に第 4 回審査委員会を開き、審査結果報告書（案）の検討と確認を行った。平成 22 年 6 月 1 日に、第 5 回審査委員会を開き、審査結果報告書を確定した。

本論文は、戦後の文学作品や批評が敗戦前後の「経験」をどのように言説化しているのかに着目しながら、分析・考察することを目的としている。「経験」は単に回想されたり報告されたりしているのではなく、想像力を媒介にして言説化されているという観点から、「経験」を産出する効果を持つ言語行為の諸相を明らかにしようとする。

その方法は、当時の社会的・歴史的文脈の中に戦後をめぐるテキストを還元することとも、そうした文脈を超越するものとして特定のテキストを特権化することとも異なる。文学的言説は戦後のさまざまな文脈の中に位置づけられるものであるが、同時にそうし

た文脈を議論の俎上に載せて、変容させることさえある。つまり、本論文で取り上げる文学者たちは、戦後日本の出発をめぐる文脈にある程度までは規定されながら、その文脈の中に孕まれる問題を炙り出したり、別の文脈を突き合わせたりしたのだと主張する。本論文のタイトルにある〈戦後〉という表記には、戦後の自明性を疑うという意味を持たせているが、同時に、戦後を問い直す戦後文学の営為そのものを、同時代としての〈戦後〉として見出すという意図も込められている。

本論文の研究成果は、平野謙や荒正人といった『近代文学』派の言説の特質と問題点を参照枠にしなが、〈戦後〉の問い直しと再評価を行った点にある。これにより、坂口安吾、中野重治、梅崎春夫、武田泰淳、竹内好といった文学的な背景の異なる文学者たちを共通の視点において分析できる台座を確保し、戦後文学の見取り図を再定義することができた。またそれぞれの作家のテキスト分析においても、「書く」という行為がもつ他者指向性や行為遂行性、一回性の特質に自覚的なテキストとして、戦後の文脈において再評価することに成功している。

とりわけ、梅崎春夫の一連の作品分析は、本論文中において量・質とも特筆すべき研究成果を挙げている。「桜島」発表当時に提起された「政治と文学」の枠組みを用いた荒正人の評価やそれを踏襲している多くの先行研究の視点に立つ限り、「私」のモノローグは確かに軍隊批判や他者との対峙とは結びつかず、主体性を持たずにひたすら揺らぎ続けているとしか読むことはできないのであるが、登場人物との関係や随所で起こる情報の錯綜・誤認について詳細に検討した結果、「私」の言動は単純に自閉的であると割り切ることができないということを明らかにした。「言葉」の行為遂行的な位相に焦点化し、主体の転倒した形成過程を分析した画期的な「桜島」論となっている。

ただし、『近代文学』派を批判する戦中派や戦後派の言説の問題点が十分に分析されていない面もあり、『近代文学』派を相対化する視点が、やや性急で一面的なところも散見する。また、原子爆弾の投下をめぐる荒正人らの人類の絶滅という表象不可能な未

来から出発する抑止論的な想像力に対して、武田泰淳の「世界」の「持続」を支える構成要素としてとらえる「滅亡」観を提示し、「終末」論の問題点を指摘したところなどは示唆に富むものの、この議論が問題提起に留まり、十分に展開されているとは言い難い側面もある。

しかし、このような問題点は、本論文の対象領域の広さと射程の長さ由来のものであり、上述の研究成果をいささかも損なうものではない。

本審査委員会は、以上のような審査結果により、全員一致して本申請論文が博士（文学）の学位を授与されるにふさわしいものであると認定した。

平成 22 年 6 月 11 日開催の文学研究科教授会において、審査結果を報告し、平成 22 年 7 月 16 日開催の文学研究科教授会において、申請者の学位授与が承認された。